
かすみのとてもちいさな とてもおおきな とてもたいせつな たからもの

鈴雪

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かすみのとてもちいさな とてもおおきな とてもたいせつな
たからもの

【Zコード】

N1046W

【作者名】

鈴雪

【あらすじ】

彼がいなくなつた世界、霞の行動が一つの奇跡を生む。

あの人気が、白銀さんがいなくなつてから、博士が言つ通り、みんながあのを忘れてしました。

『白銀つて誰のことよ』

『ごめん社、白銀つて誰だっけ?』

『はあ、武ね。思い出せないわねえ。ところで、霞ちゃん、今日も鰯味噌でいいのかい?』

誰に尋ねてもそういう返事が返つてきます。誰も覚えていない。

それが無性に悲しくて、寂しかつたです。

この世界を救つてくれたあのを、たつた一人の女の子を助けるためにずっと頑張つていたあののことを、私しか覚えてなかつたことが。

そして、あの人気がいなくなつてから一ヶ月でしじうか、私は気づきました。私も思い出せなくなつてていることに。

あの人の顔を、声を、言葉を、私も思い出せなくなつてる。

あんなに大切だったのに、忘れないつて約束したのに、私の宝物も他の人のように消えていくつていく。そのことに私は愕然としました。

嫌! 絶対に嫌!!

だから、私は博士に相談しました。

最初、博士は私の妄想と切り捨てようとしたけど、私の話が自分の研究に関わることと、実際にそういう存在がいないと納得のいかないことがあると理解してくれたら、少しだけアドバイスをくれました。

それは、文字にすること。文章にして遺すことでした。

記憶はなくなる。でも、文字はなくならない。

確かに以前の博士も同じことをしていたの思い出しました。でも、あの時と違つて本当に消えないのかわかりませんでしたが、

それでも、私にはそんな手段しかありませんでした。

私は一心不乱に書きました。覚えてること、忘れうこと、そういうしていのうちに思い出せたこと。

初めて会った時のこと。私と何度もお話ししてくれたこと。何度も起こしに行つたこと。皿殻をプレゼントしてくれたこと。一緒に寝たこと。一緒にご飯を食べたこと。あーんをしたこと。

……神富寺軍曹が殺されたショックであの人が逃げ出したこと。純夏さんのこと。

桜花作戦で私も純夏さんやあの人たちと一緒に戦えたこと。お別れの時に約束したこと。

全部全部、私は書きました。大切な思い出を、私の大切な宝物を。それを、博士に見せたら「子供の日記ね」なんて笑っていました。そうだと自分でも思います。

難しい技術用語や隠喩は博士の横にいたから、自然と覚えることができましたが、私自身の語彙はあまり豊富じやありません。それでも私には十分でした。

だけど、博士はそれに何かを書き込んでいきました。そして、はい、あたしなりに修正箇所を記したから自分で直しなさい。博士の突然の言葉に私は戸惑いました。だって、私と違つて、博士自身にはこれになんの価値もないはずなのに。なんでそんなことをするのかと尋ねたら、

実験よ。ただの、ね。

そう博士はなにかを企んでいるときに浮かべる笑みをしていました。

私には博士の考えていることはわかりません。私があまり使ったくないリー・ティングという手段も博士に対しても阻害されます。でも、博士がやれといつならにか意味があるはずと私は言われた通りに直しました。

直しては博士に見せて、修正を指示されて、時には周りの人にもどうすればいいのかを聞きました。

それを何度も繰り返すと、博士にもういいと言われました。

そして、博士は私の書いた文章を、の人と私の物語を改めて纏めると、世界中にそれを流しました。

確かに私はみんなにあの人ことを知つてほしいとは思つてましたが、何も覚えてない博士がどうしてこんなことしたのか、最後は機密に抵触するはずのそれをなんで世界中に流したのか、本当にわかりませんでした。

世界に広まつたその評価はいろいろです。荒唐無稽と切り捨てる人、あの人たちの物語を純粹に楽しんでくれた人。

そして、世界中でその物語は有名になりました。

一人の少年の、とてもちいさな とてもおおきな とてもたいせつな あいとゆうきのおどきばなしは。

あれから数年が経ちました。

あの人のお心の残したもののおかげで、人類はついにユーラシア大陸の一部を奪還しました。

でも、私の心にはまだ曇りがかつていました。

なぜなら、ついに、私があの人の顔も声も思い出せなくなりました。何度も自分の書いた物語を読み直して、何度も何度も記憶の補填を続けたのに、そういう人がいたということしか思い出せなくなり始めました。

私はあの人とお別れをした桜並木に来ました。

かすかにあの人輪郭が見えた気もしますが、もうわかりません。

白銀さん

そつと名前を呼びました。

私はうつむきます。その呼びかけもなにかが欠けている気がしました。

武ちゃん

純夏さんのように呼びかけて、

なんだ霞?

返事が返つてきました。

え？

目の前を見る。そこに一人の青年がいました。

ああ、この顔です。この声です。私の大切な、私の大好きなあの
人、白銀武。

自然と私は笑みを浮かべ、涙を零していました。

ただいま霞。

おかえりなさい白銀さん。

（後書き）

クロニクルをやってから久しぶりにオルタネイティヴをやっていたら唐突に思いついた内容です。

武と霞の再会は一つの奇跡であり、夕呼の企み。

世界中に武の物語が知れ渡ることによつて、因果情報が補填され再び武がこの世界に現れるための。

この後二人がどうなるかはみなさんの想像にお任せします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1046w/>

かすみのとてもちいさな とてもおおきな とてもたいせつな たからもの

2011年10月4日19時07分発行